

〈新刊紹介〉

福沢将樹著

『ナラトロジーの言語学——表現主体の多層性——』

本書は、ナラトロジー（物語論）の根幹にかかわる「表現主体」の概念を言語研究の側面から考察する書である。日常言語と文学における文芸言語とに共通性があるという立場から、両者に存在する表現主体の内実を九つの階層に分け、その切り分けを明確にすることにより言語自体の特徴を明らかにすることを試みる。

本書の構成は次のとおりである。「第一章 総論」には「1 表現主体の多層性」, 「2 〈人物〉と〈人格〉」, 「3 語用論と統語論」, 「4 発信者と受信者の概念, 「ラング」の存在」, 「5 文字言語と書記言語, 音声言語と口頭言語」。「第二章 表現主体」には, 「1 まず二層——〈言及対象〉と〈視点〉——」, 「2 〈視点〉と焦点化」, 「3 〈語り手〉」, 「4 〈作者〉像」, 「5 中間まとめ（四階層）」, 「6 〈作者〉の細分——〈作家〉と〈内在する作者〉——」, 「7 〈語り手〉の三分類」, 「8 〈視点〉の三分類」, 「9 まとめと物語世界の内と外（再論）」。「第三章 虚構と表現主体の階層」には「1 「虚構」とは——日常言語と文芸言語——」, 「2 嘘の諸類型」, 「3 虚構の諸類型」, 「4 嘘と虚構のまとめ」。「第四章 引用と表現主体の階層」には「1 直接話法と間接話法」, 「2 体験話法の二つの性格」, 「3 引用の諸相」, 「4 引用のまとめ」。「第五章 時間と表現主体の階層」には「1 時制の階層」, 「2 物語と時間軸」, 「3 テンス・アスペクト」, 「4 時間の各階層」, 「5 まとめ」。「第六章 結語」。「付録 文章を潜在的に引用する機能について」には「導入」, 「1 提案」, 「2 諸説との対応」, 「まとめと今後の展望」。末尾に「あとがき」, 「参考文献」, 「索引」を付す。

(2015年10月5日発行 ひつじ書房刊 A5判縦組み 360頁 3,200円+税 ISBN 978-4-89476-759-1)

城田俊・尹相實著

『ことばの結びつきかた——新日本語語彙論——』

本書は、現代日本語の語彙を対象とし、その語彙的特性、他の語との結びつき等の文法的特性、意味的特性を広範かつ詳細に記述、考察したものであり、研究書としてだけでなく、言語教育、言語学習等にも活用できる実用参考書としての側面も併せ持っている。

本書の構成は次のとおりである。「本書の構成」, 「本書の利用法」に続き, 「序論」に「第1章 ことばの結びつきと意味」, 「第2章 主な用語と意味をとらえる手段」, 「本論」に「第1章 強調語」, 「第2章 真正語」, 「第3章 称賛語」, 「第4章 動詞化動詞」,

「第5章 機能發揮語と要求充足語」, 「第6章 生成語」, 「第7章 無化語」, 「第8章 悪化語」, 「第9章 加害語」, 「第10章 結果語」, 「第11章 集団語」, 「第12章 成員語」, 「第13章 首長語」, 「第14章 性別語」, 「第15章 指小語」, 「第16章 指大語」, 「第17章 中心・頂点語」, 「第18章 役柄名詞と状況名詞」, 「第19章 助数詞」, 「第20章 様態と鳴き声のオノマトペ」, 「第21章 同義語」, 「第22章 尊敬語」, 「第23章 丁寧語」, 「第24章 反義語」, 「第25章 反転語」, 「第26章 自動詞・他動詞」, 「第27章 総称語」, 「第28章 品詞転換語」を収める。末尾に「主な記号・略記一覧」, 「引用辞書, 新聞, 雑誌の略記表」, 「参考文献」, 「引用辞書, 新聞, 雑誌」, 「あとがき」, 「事項索引」, 「語彙索引」が付く。

(2015年10月26日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 741頁 13,000円+税 ISBN 978-4-89476-723-2)

近藤泰弘・田中牧郎・小木曾智信編

『コーパスと日本語史研究』

本書は、国立国語研究所の共同研究プロジェクトの一つである「通時コーパスの設計」(基幹型プロジェクト)の成果報告書である。このプロジェクトの目的は、国立国語研究所の従来のコーパス事業を基本とし、江戸時代以前の古典語を中心とした日本語史研究のための通時的・歴史的コーパス構築に関する諸問題を研究することにある。本書では、コーパスの概要とそれを用いた研究に加え、これまで相互に情報交換を行ってきたオックスフォード大学の『上代日本語コーパス』(OCOJ)についての論考も掲載し、現時点におけるコーパスを用いた日本語の歴史的研究について網羅的に把握できる一書となっている。

本書は、ひつじ研究叢書〈言語編〉第127巻として発刊された。

本書の構成は次のとおりである。「『日本語歴史コーパス』と日本語史研究」(近藤泰弘)、「通時コーパスによる言語の研究」(山元啓史)、「平安期の〈名詞句+係助詞〉の格——その実態から見た係助詞の性質と副助詞との関連性——」(山田昌裕)、「受諾場面における形容詞使用の実態——中古語「よし」「やすし」の場合——」(高山善行)、「中古和文における接続表現について」(岡崎友子)、「中古和文における文体別の特徴語」(小木曾智信)、「『今昔物語集』に見る文体による語の対立」(田中牧郎)、「人工頭脳プロジェクト「ロボットは東大に入れるか」——国語試験古文問題解答に向けて——」(横野光)、「Why Romanize a Corpus of (Old) Japanese?」(Bjarke Frellesvig)、「The Oxford Corpus of Old Japanese」(Stephen Wright Horn and Kerri L. Russell)、「コーパス日本語史研究目録」(間淵洋子・鴻野知暁)、「『日本語歴史コーパス 平安時代編』の形態論情報」(富士池優美)。末尾に「あとがき」「索引」「執筆者一覧」を付す。

(2015年10月28日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 312頁 6,800円+税 ISBN 978-4-89476-751-5)

三原健一著

『日本語の活用現象』

本書は、生成文法理論における統語論の枠組みを基盤に、現代日本語における動詞の活用と関連諸現象について論じたものである。統語論的分析だけでなく、日本語学の方法論を用いた意味に対する議論も行っている。各章においてそれぞれの活用形の分析が提示されており、現代日本語の動詞においては同形である終止形と連体形を「断定 (assertion)」を中心に論じ、日本語においても「不定形 (infinitive)」を設けるべきであるとしている。また、生成文法理論に馴染みが薄い読者にも分かりやすいような解説がなされている。

本書は、ひつじ研究叢書〈言語編〉第131巻として発刊された。

本書の構成は次のとおりである。「第1章 活用形」, 「第2章 連用形」, 「第3章 終止形と連体形——叙法断定を中心に——」, 「第4章 終止形と連体形——時間断定を中心に——」, 「第5章 テ形」, 「第6章 不定形」。「参考文献」と「索引」が付く。

(2015年11月9日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 140頁 3,800円+税 ISBN 978-4-89476-768-3)

秋元実治・青木博史・前田満編

『日英語の文法化と構文化』

本書は、日本語と英語を対象とした構文化および文法化への多様なアプローチを収めた論集である。共時的・通時的どちらの視点からの研究も含んでいる点、日本語学と英語学から研究者が参加し、協働が図られている点が特徴的である。

本書の構成は次のとおりである。「第1章 文法化から構文化へ」, 「第2章 Time-away 構文の適格性条件」, 「第3章 supposing 節の構文化現象」, 「第4章 構文化としての脱従属化 if only 祈願文の事例を通じて」, 「第5章 現代アメリカ英語の二重コピー構文 再分析, 構文拡張, 談話構造の観点から」, 「第6章 「～ない程度に」と「～ない範囲で」に関わる構文研究」, 「第7章 複合動詞における文法化の一考察 「～切る」「～過ぎる」「～出す」を例に」, 「第8章 日本語の「補助動詞」と「文法化」・「構文」」, 「第9章 終止形・連体形の合流について」, 「第10章 「とも」から「ても」へ」。末尾に「索引」が付く。

なお、本書は、平成27年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)の助成を受け、ひつじ研究叢書〈言語編〉第132巻として発刊された。

(2015年11月30日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 340頁 7,200円+税 ISBN 978-4-89476-773-7)

今野真二著

『図説日本語の歴史』

本書は、漢字・漢語使用の側面から文字表記・文体の変遷をとらえた書である。大正時代までの日本語を対象とし、各節に文献の実物写真を多く掲げている。

本書の構成は次のとおりである。「第1章 奈良時代」には『古事記』をはじめ、「中国の書物に記された日本語——魏志倭人伝——」, 「漢字と仮名との調和美——桂本万葉集——」を含む10項目が収められる。続いて「第2章 平安時代」には、「日本化する漢和辞書——類聚名義抄——」, 「和文体の説話集——古本説話集——」を含む13項目が収められる。「第3章 鎌倉・室町時代」には「和漢混淆文の先駆——方丈記——」, 「中世の話しことば——史記抄——」を含む14項目が収められる。「第4章 江戸時代」には「全国方言辞書——物類称呼——」, 「語の正しい姿を追求——和字正鑑鈔——」を含む14項目が収められる。最後の「第5章 明治・大正時代」には「漢語の流行——漢語都々逸など——」, 「ウィルソンリーダーを翻訳——小学読本——」, 「手書きのロジック——漱石の手書き原稿——」などを含む15項目が収められる。末尾に「あとがき」を付す。

(2015年11月30日発行 河出書房新社刊 A5変形判縦組み 160頁 2,000円+税 ISBN 978-4-309-76273-1)

加藤重広編

『日本語語用論フォーラム 1』

本書は、文法と語用論のインターフェイスを基盤とし、日本語の話しことばの研究を行う論を紹介するものである。「語用論」を「日本語ということばを使うこと」と位置付け、日本語の様々な運用面を取り上げる。たとえば、「ネオ敬語「(ッ)ス」の語用論的機能」においては、丁寧語形式「デス」の変形と見られる「(ッ)ス」をネオ敬語と位置付け、統語的・語用論的特徴だけでなく、「ス」の使用動機を「社会的言語運用能力の発達」(Wording)の観点から明らかにする。

本書の内容は次のとおりである。「語用論がかかわる次元と日本語——初めに間主観性があった、と言ってはならないか?——」(滝浦真人), 「発話的な効力と発話内的な効力——日本語の疑問形式を出発点に——」(加藤重弘), 「ダイクシスからみた日本語の歴史——直示述語、敬語、指示詞を中心に——」(澤田淳), 「逸脱文の意味と推論——逸脱的な「のが」文の実例考察——」(天野みどり), 「条件節で疑問文を引用する構文——認知語用論的考察——」(山泉実), 「ネオ敬語「(ッ)ス」の語用論的機能」(呉泰均), 「接続詞「なので」の成立について」(尾谷昌則), 「残念な」の客観化にみる語用論的制約操作とポライトネスの希薄化現象」(首藤佐智子), 「特定秘密保護法に関する記者会見記事の批判的談話分析——トピック・連鎖・構造を中心に——」(名島義直)。末尾に、「執筆者紹介」を付す。

(2015年12月1日発行 ひつじ書房刊 A5判横組み 300頁 4,800円+税 ISBN 978-4-89476-761-4)

プラシヤント パルデシ・桐生和幸・ハイコ ナロック編

『有対動詞の通言語的研究——日本語と諸言語の対照から見えてくるもの——』

本書は、「他動性」と関連諸現象に関する多くの言語を対象にした研究を収めた論文集であり、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」の言語類型論チームの研究成果の一部をまとめたものである。

本書の構成は次のとおりである。「序論」に続き、「第1部 東アジア・北東アジア・中央アジア」には「日本語自他動詞対のコード化の頻度論的動機付け：大規模コーパスによる検証」、「見つかる／つかまる」クラス述語の他動性」、「日本語族における他動性交替の地域差」、「コリヤーク語のS=A交替における格枠組みと被動作性」、「ツングース諸語の自他について」、「韓国語の語彙的自他交替：接辞 -i/hi/li/ki- による派生の双方向性」、「モンゴル語の身体部位運動を表す文に見られる動詞の形態」、「ギャロン語ヨチ方言の他動性：自他動詞対からの分析」、「現代ウイグル語の他動性について：形態的派生の方向性と意図性の観点から」、「チュルク語の自他交替の方向性：交替タイプの変異と安定性」、「第2部 東南アジア・南アジア」には「ラマホロット語の自他交替」、「タイ語の Freeze 事象表現：コーパスを使った事例研究」、「ラワン語の自他動詞：形態的対応と事象のコード化の面からの考察」、「メチェ語の使役動詞の形態的特徴」、「ネワール語における自他動詞対：民話テキストの動詞分類と考察」、「日本語を通してみたヒンディー語の語彙的・統語的他動性：複合述語 N/A + kar-naa 「する」に焦点をあてて」、「ヒンディー・ウルドゥー語の語彙的自他対における有標性の役割」、「スィンディー語の動詞派生：受動動詞が表すもの」、「ブルシャスキー語の動詞語幹と他動性」、「第3部 アフリカ・ヨーロッパ」には「トーロ語における自他動詞の交替」、「スワヒリ語における有対動詞：派生の形式と動詞の意味を中心に」、「リトアニア語の自他交替：反使役を中心に」、「ハンガリー語の自他動詞と項構造」、「コーパスから見たハンガリー語の自他動詞」、「アイスランド語の衣類の着脱表現」の各論文を収める。「付録 現代語自他対一覧表」、「執筆者一覧」、「事項索引」、「人名索引」、「言語索引」が付く。

(2015年12月17日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 479頁 4,600円+税 ISBN 978-4-87424-679-5)

荻原俊幸著

『「もの」の意味、「時間」の意味——記号化に頼らない形式意味論の話——』

本書は、「もの」と「時間」を題材にし、その比較を通して形式意味論の基本的な考え方を解説したものである。日英語の様々な言語現象の考察を通して、「もの」の意味を取り扱う枠組みが「時間」の意味の分析にどのように適用できるのか検討している。形式意味論の大きな特徴の一つであり同時にその難解さの要因の一つでもある厳密な形

式化を前面に出さず、形式意味論の研究における論点や視点の紹介に焦点を当てている。

本書の構成は次のとおりである。「第1章 はじめに——形式意味論の世界ようこそ!——」, 「第2章 指示・量化・前提」, 「第3章 文脈依存と直示性」, 「第4章 可能世界について——外延と内包——」, 「第5章 時制形態素」, 「第6章 アスペクト(相)」, 「第7章 時間副詞」。末尾に参考文献と索引, また, 各章末に練習問題が付く。

(2016年1月15日発行 くろしお出版刊 A5判横組み 198頁 2,200円+税 ISBN 978-4-87424-680-1)

高山倫明・木部暢子・松森晶子・早田輝洋・前田広幸著

『シリーズ日本語史1 音韻史』

本書は、『シリーズ日本語史』全4巻中の第1巻として編まれ、刊行順としては最後になったものである。日本語の音韻史研究をめぐって、基礎的・概説的な事項から様々な理論的枠組みによる相当に専門的な議論まで、多岐にわたって解説されている。

本書の構成は、次のとおりである。冒頭に、シリーズ共通の「日本語史へのいざない」を置き、「第1章 音声学と音韻論」, 「第2章 文献学」, 「第3章 音韻史」, 「第4章 アクセント史」, 「第5章 比較方法・言語類型論による接近法」, 「第6章 生成音韻論による接近法」, 「第7章 最適性理論・他の理論による接近法」が続き、「参考文献」, 「索引」が付く。また、各章末には、それぞれの分野における古典的業績を主とした数冊の内容を簡潔に紹介した「読書案内」が添えられている。各執筆者の分担は、高山(編者, 第1~3章), 木部(第4章), 松森(第5章), 早田(第6章), 前田(編者, 第7章)となる。
(2016年1月27日発行 岩波書店刊 A5判横組み 264頁 4,400円+税 ISBN 978-4-00-028127-0)

荻原義雄編

『西来寺蔵仮名書き法華経対照索引並びに研究』

本書の主内容は、『仮名書き法華経』研究において最重視されてきた妙一記念館本(識語欠(鎌倉時代中期)写)と類似する形態で綴られている西来寺本『仮名書き法華経』(識語欠(江戸時代中期)写)に注目し、既に影印編(木村晟他と共編, 1993年)・翻字編(1994年)を公刊してきた著者が、その自立語を全抽出し、五十音順に排列した索引である。全語例について、漢字表記、品名、影印本・翻字編での頁行数、書込みの有無などを示し、加えて、妙一記念館本(識語欠(鎌倉時代中期)写)との対照も図っている。

併せて、西来寺本『仮名書き法華経』使用語彙の国語辞書への収録状況を調査し、語の種類や性格を詳細に分析した論考『『仮名書き法華経』における語彙考察』を収める。
(2016年1月27日発行 勉誠出版刊 B5判縦組み(研究編)70頁 横組み814頁 35,300円+税 ISBN 978-4-585-28019-4)

松本克己著

『ことばをめぐる諸問題——言語学・日本語論への招待——』

本書は、著者のこれまでの論考を一書にしたもので、内容は「第Ⅰ部 言語と民族」,「第Ⅱ部 言語の類型と歴史」,「第Ⅲ部 言語の構造と認知」,「第Ⅳ部 日本語・日本人のルーツを探る」の4部に分かれる。そのなかでも著者が特に注力したⅣ部は、イネ・コメの起源と伝播に着目し、朝鮮語・日本語の稲作語彙が東アジア稲作圏全体のなかで孤立している要因を、東アジア北方域への稲作の伝播が南方と異なる形で実現したことに求めた論考である。その他、日本語学、国語・国文学関係の雑誌に寄稿した短編の論説や、シンポジウムでの講演原稿をもとにした論考が含まれる。

本書の構成は次のとおりである。第Ⅰ部には「第1章 世界の言語——その現状と未来——」,「第2章 ヨーロッパの言語と民族」。第Ⅱ部には「第3章 言語類型論と歴史言語学」,「第4章 日本語と印欧語」,「第5章 語順の話」,「第6章 語順のデータベース」,「第7章 言語史にとっての60年」,「第8章 歴史言語学入門」。第Ⅲ部には「第9章 数の文法化とその認知的基盤」,「第10章 言語研究と「意味」」,「第11章 言語現象における中心と周辺」,「第12章 能格性に関する若干の普遍特性」。第Ⅳ部には「第13章 イネ・コメ語源考」,「第14章 イネ・コメの比較言語学」,「第15章 私の日本語系統論」を含む。末尾に、「収録論文初出」,「あとがき」を付す。

(2016年2月16日発行 三省堂刊 A5判横組み 308頁 2,500円+税 ISBN 978-4-385-36276-2)